

国立 国会 図書館 月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2025.11



新連載 シリーズ 国立国会図書館のウラ側
第1回 ギャラリー展示のできるまで
憲政資料室の新規公開資料から

国立 国会 図書館 月報

NO. 775
NOVEMBER 2025

CONTENTS

- | | | | |
|----|--|----|------------------------------------|
| 1 | 「土山蔵書目録」
—江戸時代の朝廷下級役人の知的営為—
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から | 7 | 館内スコープ
雑誌書庫へようこそ！ |
| 8 | 新連載 シリーズ 国立国会図書館のウラ側
第1回 ギャラリー展示のできるまで | 17 | 本屋にない本
『明治東京の書生社会 鈴木鹿之介在京日記の世界』 |
| 18 | 憲政資料室の新規公開資料から | 25 | N D L TOPICS |



表紙：中村不折 画
夏目漱石『吾輩ハ猫デアル 上』挿絵
大倉書店 1905 23cm
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13046229/1/86>

「土山蔵書目録」―江戸時代の朝廷下級役人の知的営為―

武田和也



土山蔵書目録 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2592981/1/3>

土山蔵書目録（禁裏御所御用日記 第358冊）

写；12×33cm

<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592981/1/3>

書籍の流通が拡大した江戸時代。書籍を用いた知的交流も盛んとなります。そのような知的営為が分かる「土山蔵書目録」は、土山家伝来の資料群「禁裏御所御用日記」（全393冊^①）に含まれる一冊で、188タイトル904冊の書籍が記載されています^②。

土山家は「御隨身^{みずいしん}」として朝廷の儀式の際に大臣・大將に供奉する役等を務めるほか、御所の日常業務を担う口向の筆頭職「取^{とり}（執次^{つぎ}）」も兼ねた朝廷の下級役人（地下官人^{じげかんじん}）の家です。御所清和院御門前の元百万遍屋敷（上京区）に「武家構えの大家」と称された屋敷^③を持ち、江戸幕府から石倉村・白井村（伏見区・向日市）に125石の領地を与えられていました。日蓮宗の本清寺（伏見区）や頂妙寺（左京区）を菩提寺としており、久我家（堂上家^{どうじょうけ}）とは一種の主従関係（家礼^{けらい}）にありました^④。

蔵書を内閣文庫の国書分類を参考に整理すると「歴史」（21タイトル・11％）「典礼・儀式」（23タイトル・12％）「漢籍・準漢籍」（30タイトル・16％）や「神祇」（25タイトル・13％）「文学」（40タイトル・21％）「言語」（23タイトル・12％）の割合が高く、記載順は、前半に「歴史」「典礼・儀式」、中盤に「神祇」「文学」「言語」、後半に「漢籍」「準漢籍」が多い傾向にあることが見て取れます。また、著者を調べると、皆川淇園（儒者^{みながわきえん}）の著書が12冊もある

「土山蔵書目録」記載書籍一覧

日本書紀、続日本紀、続日本後紀、文徳実録、三代実録、令義解、律、唐律疏議、類聚三代格、延喜式、儀式、内裏式、西宮記、北山抄、江家次第、神皇正統記、旧事記、古事記、逸令考、仮名装束抄、輅考、禁秘抄、拾芥抄、御代始抄、代始和抄、天智外記、公事根源、年中行事、東宮年中行事、選叙令結階私考、大槐秘抄、廳下部附物抄、衛府装束抄、禁腋秘抄、貴嶺問答、世俗浅深秘抄、桃華藥葉、北山行幸記、姓氏録、陵考、山陵志、諸家知譜拙記、皇年代記、飾抄、物具装束抄、職原抄、名目抄、紹運録、群書類従紹運録、和漢年契、法曹至要抄、君臣略伝、大系図、古事記伝、万葉集、古今集打聞、伊勢物語古意、湖月抄、竹取物語抄、枕草子春曙抄、古今六帖、新撰六帖、和名抄、冠辞考、言葉の玉緒、袖中抄、八雲御抄、呉竹集、万葉東語集、語意考、歌意考、文意考、字音仮名用格、祝詞考、桐火桶、祝詞考、新撰字鏡、古言梯、漢字三音考、ふりわけ髪、徒然草、靈語通、三部抄之抄、和字正濫抄、譯文童噺、国文世々の跡、悦目抄、和歌八重垣、文の葉、歌文要語、土佐日記抄、源氏玉の小櫛、源註拾遺、紫式部日記、群書類従十六夜日記、清輔雜談集、新撰万葉集、万葉集燈、古語拾遺、元々集、神代巻抄、仮名神代巻、五部之書、神代巻惟足講説、中臣祓諸葉草、陽復記、神明憑談、開闢第一之一書、神令、東家秘伝、神宮秘伝問答、神宮統秘伝問答、古史成文、古史徴、開題記、神代系図、たまのみはしら、五経、二大家文集、四書、四書、史記、左氏傳、国語、呂氏春秋、韓非子、莊子、文章軌範、史記助字法、左伝助字法、字語篇、詩筌、尺牘式、虚字解、続虚字解、字彙、古文前集、古文後集、春秋存疑、老子釋解、易原、孝経、唐詩選掌故、韻鏡、名嘯、雜字類篇、世説講義、蒙求、実字解、世説啓微、助字詳解、遷史戾杞、易学階梯、五経、中庸釋解、和漢名數、可成談、六諭衍義、佛道大意、蘭学階梯、庭訓往来、好古日録、好古小録、環海異聞、釈氏稽古録、釈氏要覧、古野の若菜、三大考弁論、鎖国論、鈴屋都日記、淇園文集、遠古度点、万那備能広道、口遊、柳宮秘鑑、公儀年中御規式、裁許破綻背ノ内、衝口発、鉗狂人、御幸宸記、言葉直路、官職便覧、古義韻鏡、万葉山常百首、改編はしかきふり、直日霊、尺牘双鱼、閑窓自語



「御隨身」で儀式に供奉する際の姿 「装束着用之図」2(丑58)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2553401/1/17>

土山家蔵書の主な著者

著者名	生没年	冊数	著書	備考
皆川淇園	1734～1807	12	「名嘯」「易原」「淇園文集」ほか	儒者
本居宣長	1730～1801	7	「古事記伝」「源氏物語玉の小櫛」ほか	国学者
賀茂真淵	1697～1769	7	「祝詞考」「冠辞考」ほか	国学者
平田篤胤	1776～1843	6	「古史成文」「霊能真柱」ほか	国学者
いちじょうかねよし 一条兼良	1402～1481	4	「桃華藥葉」「公事根源」ほか	公家
きたばたけちかふさ 北 昌親房	1293～1354	4	「職原抄」「神皇正統記」ほか	公家
わたらいのぶよし 度会延佳	1615～1690	3	「陽復記」「神宮秘伝問答」ほか	伊勢神宮 権禰宜
本居大平	1756～1833	2	「万葉山常百首」ほか	国学者



「執(取)次」として勤務する姿「十二月大樹薬園之薬種進献之儀」
(東京国立博物館蔵「旧儀式図画帖」)
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0038372>

ほか、蘭学者(志筑忠雄、大槻玄沢)、国学者(賀茂真淵、本居宣長・大平父子、平田篤胤等)の著作も見られ、刊行年を分ける範囲で調べると、1750～1850年の間のものが4分の3を占めていることが分かります。(以下、「土山蔵書目録」記載の書籍は本文中で太字にしています。)

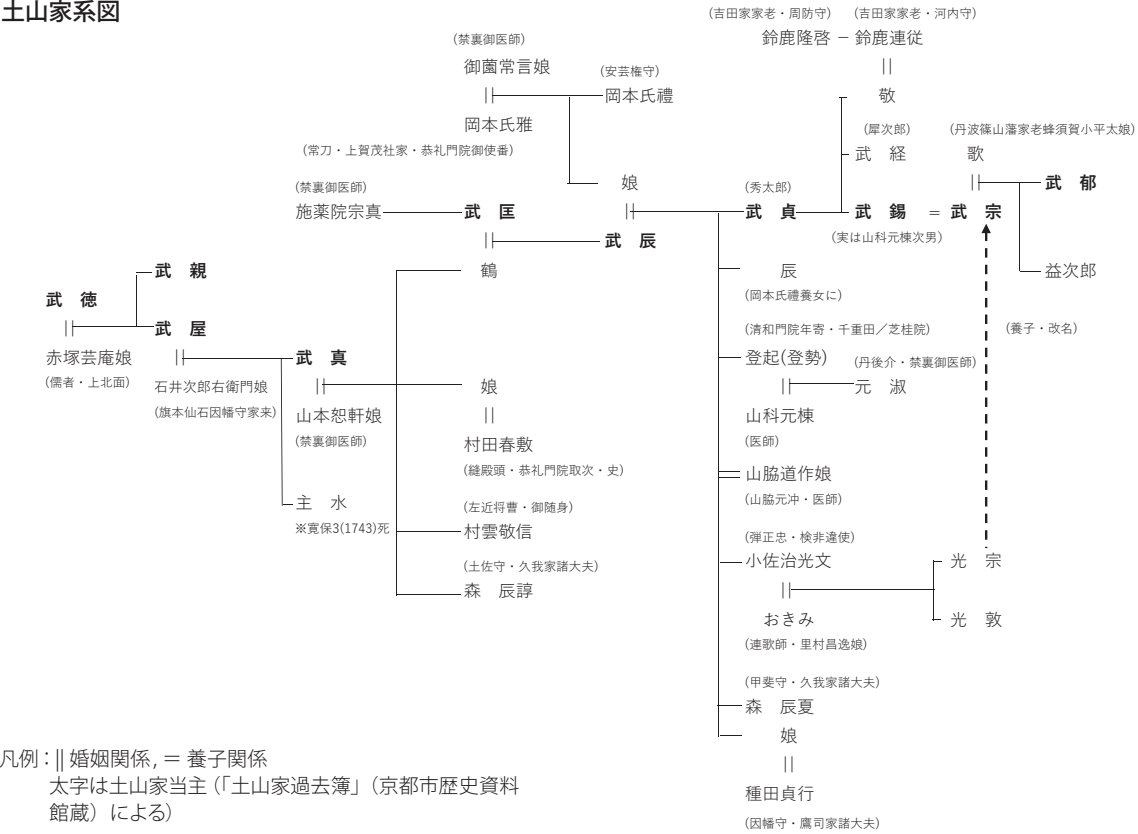
これらの特徴は同家が必要とした知識や蔵書が構築された年代を窺わせるものです。そして、その入手先は地下官人社会にありました。「延喜式」は享保14(1729)年1月から3月にかけて勢多章堅(取次・検非違使)から断続的に借り受けており、その際書き写した可能性もあります。「庭訓往来」は元文4(1739)年1月に徳田孫三郎(仕丁頭)から取得しており、「弘安礼節」には藤木庚清(日記役)の蔵書を文化13(1816)年に写したと記載があるほか、原在明(画家・縫殿寮史生)からは絵画を借り受けていて、その入手先は多様です。また、京都府立京都学・歴史館蔵「土山家文書」には日野資矩(堂上家)自筆の文化15(1818)年9月付の「大嘗会申沙汰備忘日記」が含まれており、19世紀には入手先が上層の公家に及んでいることが分かります。逆に土山家の蔵書が貸出されることもあり、西尾市立岩瀬文庫蔵の三条公修(堂上家)書入本「令義解」

子息の素読・手跡稽古開始年

年月日	対象	年齢	依頼先（役職）	典拠 （コマ数）
享保 18（1733）年 3 月 2 日	武之助	不明 *	不明	第 80 冊 （117）
天明 8（1788）年 4 月 2 日	秀太郎（武貞）	8 歳	手跡：清水俊之進（勘 使 買物使） かんづかいかいもの し	第 103 冊 （34）
天明 9（1789）年 9 月 1 日	秀太郎（武貞）	9 歳	読書：濱嶋等庭（内膳司）	第 103 冊 （176）
文化 6（1809）年 1 月 17 日	犀次郎（武経） たけつね	8 歳	手跡・素読：村雲清信（御隨身）	第 114 冊 （131）
文政 4（1821）年 7 月 8 日	武錫 たけとう	13 歳	手跡：小谷藤馬（板元吟味役） 素読：遠藤敬蔵（板元役）	第 123 冊 （156）

注：年齢は数え、典拠（コマ数）は『禁裏御所御用日記』の冊数と国立国会図書館デジタルコレクションのコマ数 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2610138>
* 武之助が寛保 3（1743）年に 19 歳で死去した主水（了達院是空）のことであれば当時 9 歳

土山家系図



凡例：|| 婚姻関係，= 養子関係
太字は土山家当主（「土山家過去簿」（京都市歴史資料館蔵）による）

出典：正宗敦夫 編『地下家伝』（覆刻日本古典全集）現代思潮社，1978 <GB43-117>、「親類書」『禁裏御所御用日記』第 370 冊、「土山家過去簿」（京都市歴史資料館蔵「土山家文書」5421-152～161）、「地下官人家伝」十二上（京都府立京都学・歴史館蔵「下橋家資料」）、宮内庁書陵部蔵「御内儀侍中家譜」 <https://doi.org/10.20730/100289833>、賀茂県主同族会蔵「賀茂祢宜神主系図」 <https://adeac.jp/adeac-arch/top/004/index.html> や『禁裏御所御用日記』内の記載事項をもとに作成した。

には享和元（1801）年に土山武貞の「令義解」で校合した旨記されているほか、梅溪恭道（堂上家）に「続日本後紀」、日野資愛（堂上家）に「延喜式」、座田維直（院雑色）に「千一言」が貸出されています。こうした関係は教育の面でも見られ、土山家では子息が 8 歳前後になると手跡（書道）や素読（漢文暗唱）の指導を、手跡能力が求められる役職の地下官人に依頼しています。蔵書に含まれる儒教の基本書「四書五経」や読み書きの教科書である「庭訓往来」は子息の教育に用いられたのかもしれませんが。

18 世紀後半の土山家は幕府直参格が認められず、御随身の触頭の地位も奪われそうになる等、その地位が脅かされる状態でした。この頃、社会的には武士身分への上昇意欲からくる下級武士・庶民の間での儒学への学習熱が、地下官人社会内では家数増の中で生き残りをかけ有職故実への関心が高まった時期でもあります。そうした中で同家の知的交流は公家社会外へも拡大し、蔵書にも反映されています。

寛政 11（1799）年、武貞は皆川淇園門下となり、文化 7（1810）年には本居大平の弟子ともなって京の鈴屋門（本居宣長派の和歌の一派）「鐸舎」に参加します。山本季鷹（国学者・上賀茂社家）の和歌会への参

土山家中元・歳暮の贈答先

年月日	贈答先	典拠 (コマ数)
寛政10(1798)年7月8日	【太鼓】佐々木将監(一条家家臣) 【儒学】三崎譲 【歌学】澤真風 【国学】山田以文	第107冊 (151)
寛政11(1799)年12月18日	【儒学】皆川淇園 【儒学】北小路竹窓力 【書】上田成美(大炊御門家家臣) 【弓術】松野兵庫 【剣術】藤井(總博)力(衛士) 【雅舞】佐々木将監 【和歌】澤真風 【柔術】近藤笈之助 【和学】山田以文 【蘭学】辻章從(久我家家臣) 【楽笛】辻高美(南都楽人)	第108冊 (141)
文化7(1811)年7月5日	【古学】服部中庸 【有職】山田以文 【漢学】北小路竹窓 【射術】松野兵庫 【雅楽太鼓】佐々木雅楽允(将監力)	第115冊 (135)
文化7(1811)年12月17日	【有職】山田以文 【國古学】服部中庸 【漢学】北小路竹窓 【射術】松野兵庫(義敬) 【雅楽太鼓】佐々木雅楽允	第115冊 (152,153)

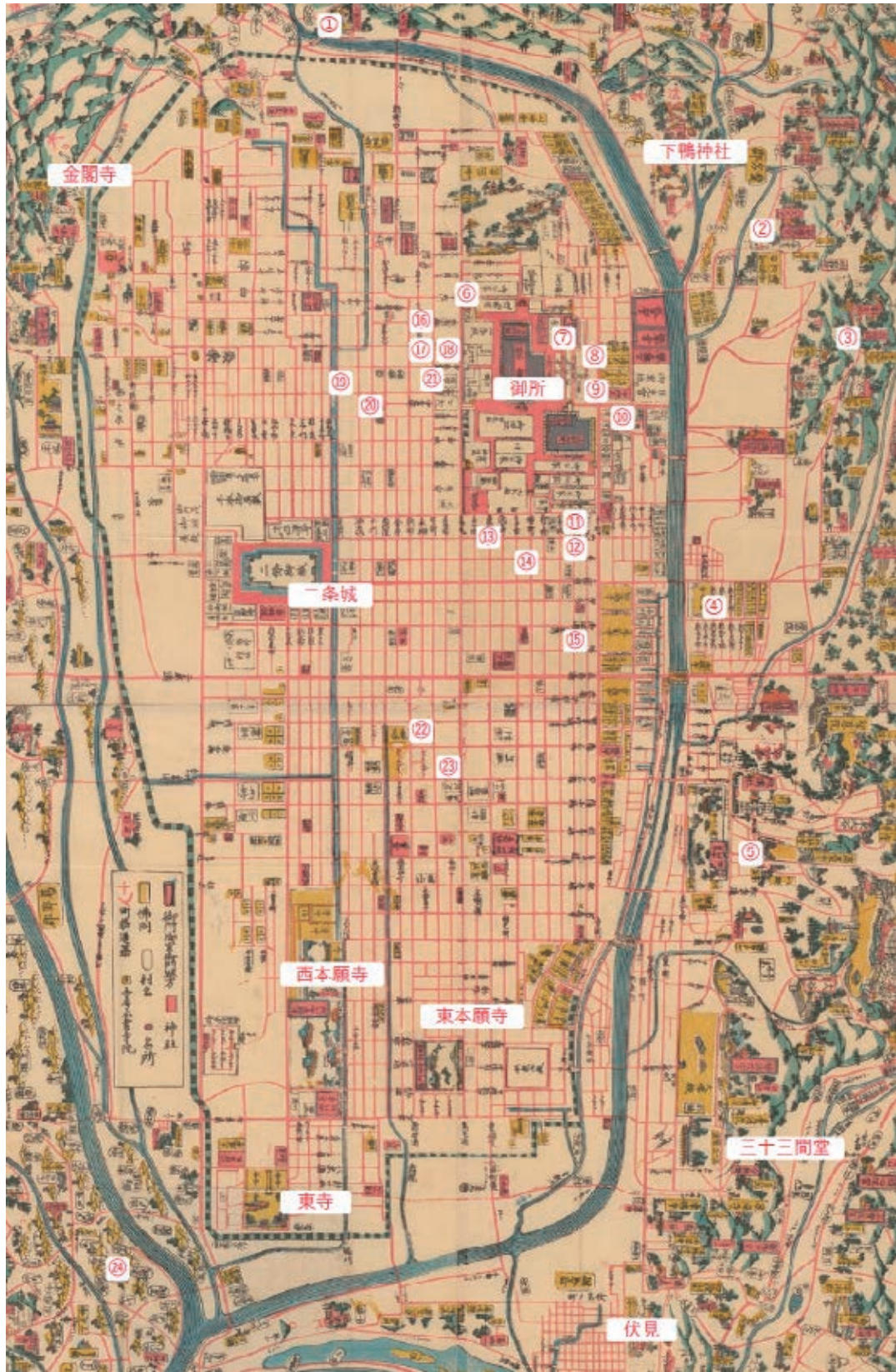
加も見られます⁽¹⁰⁾。甥で土山家を継いだ武宗は天保8(1837)年8月に山田有年(国学者・吉田社家)に入門しています⁽¹¹⁾。また、中元・歳暮の贈答先には様々な分野の専門家の名があり土山家が公家社会内外の多様な専門知と繋がっている状況が垣間見えます。蔵書はこのような関心を反映したものでしょう。享和2(1802)年12月には、山田以文(国学者・吉田社家・有年の祖父)から「好古日録」が贈られてもいます⁽¹²⁾。

さらに、武貞は享和3(1803)年には、高橋宗孝(国学者・御厨子所預)と勢多家の「延喜式」の校合を行っており、武錫も文政13(1830)年2月、山田以文や宗孝の子・高橋宗芳(有職家)の「江家次第」の学習会に参加する等、同好の士との研究活動も見られるようになります。そして、享和3年9月には、版元の竹苞書楼(銭屋惣四郎)が、刊行前の校合作業への従事のお礼として、刊行された「内裏式」を持参する等、新たな書物を生み出してもいます。武貞は文化13年、自著「千一言」の公表もしました。

ところで、武貞を「志深き学者」とする本居大平は「古事記伝首巻」「直日霊」を贈る一方、資料の参照・閲覧先を相談しています⁽¹⁵⁾。また、上京時には度々武貞と面会し、富小路貞直(堂上家)宅には同行させ終夜国

学について語りあってもいました⁽¹⁷⁾。武貞を「実によき学者」とする平田篤胤は、上京時に「開題記」「古史成文」を贈りますが、土山邸で国学者たちと議論し、「言葉直路」「千一言」を借り受け、武貞に朝廷内のことを尋ねています。この際、光格上皇の絵や有栖川宮韶仁親王の書が武貞経由で下賜されました。当時、学識のある者は、公家社会及びその周縁に広がる知的ネットワークによる取次慣行により朝廷や公家社会と繋がりを持つことができた点を持つとしたのは、彼の持つ知的ネットワークや学識を期待してのものであったでしょう。

同目録には書込も多数あります。更なる分析で新たな知見が得られることが期待されます⁽¹⁹⁾。



「細見京絵図大全 天保改正新增」(徳島大学附属図書館所蔵)を改変
<https://www.lib.tokushima-u.ac.jp/~archive/k/k011.html>

- | | | |
|----------------------|-----------------------|-------------------|
| ①上賀茂社：山本季鷹 | ⑨廬山寺前：小佐治光文 | ⑰中立売室町西：皆川淇園 |
| ②百万遍村：遠藤敬蔵 | ⑩元百万遍屋敷：土山家、村雲清信、小谷藤馬 | ⑱中立売室町東：原在明 |
| ③吉田社：鈴鹿隆啓・連従、山田以文・有年 | ⑪富小路丸太町下ル：清水俊之進 | ⑲東堀川中立売南：山脇道作 |
| ④頂妙寺 | ⑫富小路竹屋町南：山科元棟 | ⑳中長者油小路東：澤真風 |
| ⑤安井門前月見町/下河原：上田成美 | ⑬車屋町丸太町南：北小路竹窓 | ㉑室町上長者町上ル：三崎讓 |
| ⑥乾御門上ル西側：久我家 | ⑭堺町二条上ル：山本恕軒 | ㉒錦小路室町西：服部中庸 |
| ⑦中筋東側：富小路貞直 | ⑮寺町通姉小路上ル：竹苞書楼 | ㉓烏丸四条上ル：鐙舎 |
| ⑧梨木町：浜嶋等庭、高橋宗孝・宗芳 | ⑯一条室町西：里村昌逸 | ㉔石倉村・白井村・久我村(本清寺) |

※住所については、朝幕研究会編『近世朝廷人名要覧』(人文叢書；1)、学習院大学人文科学研究所、2005 <GB12-J15>や国際日本文化研究センター「平安人物志」<https://lapis.nichibun.ac.jp/heian/index.html>等を参照した。

- 1 御用日記以外に家事日記や古文書等を含みます（一部未デジタル化のものがあります）。「帝国図書館文書」所収の「大正6（1917）年4月6日付積書」＜帝文-682＞<https://dl.ndl.go.jp/pid/11447441/1/187>によると、京都・春和堂の若林政吉から購入したことがわかります。なお、京都府立京都学・歴史館所蔵『新院御所日記』は『禁裏御所御用日記』と元々一括であったとされています。
- 2 横帳形式の25丁の帳面の前半（1～9丁目）に記載されています。天明の大火（1788年）で土山邸は焼失しましたが、土蔵は焼け残っており（『禁裏御所御用日記』第103冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592733/1/16>）、大火以前からの蔵書は焼失を免れたと思われます。なお、後半には書籍が納められている蔵とは別の蔵にある諸道具類が書かれています。供膳具が多い点は、上層の町人・農民と共通するといえます。
- 3 「文政六年平田篤胤上京日記」文政6（1823）年8月22日条（『国立歴史民俗博物館研究報告』128, 2006＜Z8-2017＞）
- 4 久我家が土山家の官位昇進の申請書を事前に確認したり（前掲注2, 第176冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592808/1/120>）、久我家の任官時のお礼のための参内に土山家が付き従ったりする（同, 第115冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592746/1/145>）等「家礼」の特徴とされる行動をしています。
- 5 同上, 第76冊
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592708/1/43>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592708/1/48>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592708/1/49>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592708/1/56>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592708/1/63>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592708/1/72>
- 6 同上, 第86冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592716/1/19>
- 7 同上, 第327冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592951/1/29>
- 8 「粉本借進扣」文化14（1817）年6月1日条、文政7（1824）年9月3日条（冷泉為人「原派の絵画」『寛政文化研究』4, 1995 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2207726/1/36>）
- 9 京都大学総合博物館蔵「土山家文書」文書番号847・1248・1249・1263。梅溪・日野は武貞と同じ皆川門下、座田は武宗が学習院御用掛を務めた際の雑掌役でした。
- 10 前掲注3, 文政6（1823）年10月5日条
- 11 前掲注2, 第135冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592766/1/47>
- 12 同上, 第110冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592740/1/112>
- 13 同上, 第131冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592762/1/19>
- 14 同上, 第110冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592740/1/240>
- 15 「文政10（1827）年1月12日付竹村茂雄宛本居大平書簡」（佐々木信綱「伊豆の家苞」『こころの華』2（10）, 1899 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2381786/1/13>）
- 16 年不詳「〔二一〕8月29日付三井高蔭宛本居大平書簡」（築瀬一雄「本居大平書翰集（一）」『愛知淑徳短期大学研究紀要』25 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1740575/1/67>）、同「〔七五〕8月12日付土山武貞宛本居大平書簡」（同「本居大平書翰集（三）」『愛知淑徳短期大学研究紀要』27 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1740578/1/58>）
- 17 「春の錦」文化13（1816）年2月14日、3月3・7・9日条（『葭』24, 2011＜HA28-J18＞）、『◎文政2（1819）年6月12日付内池与十郎等宛本居大平書簡写』『福島市史資料叢書』58, 福島市教育委員会, 1991 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9540825/1/99>
- 18 前掲注3, 文政6年8月22日、9月13・26日条、「気吹舎文集」1（『新修平田篤胤全集』15, 名著出版, 1978, p.360＜HA26-6＞）、『文政六年平田篤胤上京日記（続）』文政6年10月17日条（『国立歴史民俗博物館研究報告』146, 2009＜Z8-2017＞）
- 19 例えば、「湖月抄」に「右千重田江」と土山武辰の娘・千重田に同書を譲った旨の本文と同筆と思われる注記がありますが（前掲注2, 第358冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592981/1/9>）、登起（登勢）が大宮御所（新清和院（光格天皇中宮））の年寄に就任し「千重田」に改名したのは天保4（1833）年3月17日（同上, 第133冊<https://dl.ndl.go.jp/pid/2592764/1/20>）のため、「土山蔵書目録」が執筆されたのはそれ以降と推定されます。なお、今回の調査では蔵書の現物は確認できませんでした。

○参考文献

- 相曽貴志「勢多家旧蔵延喜式について」『国立歴史民俗博物館研究報告』218, 2018＜Z8-2017＞
- 石上英一『日本古代史料学』東京大学出版会, 1997＜GB161-G84＞
- 今和泉大「部会ニュース 近世史部会 近世地下官人の特質に関する一考察」『日本史研究』642, 2016 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13007329/1/106>
- 岩崎奈緒子編『土山家文書目録』京都大学総合博物館, 2009＜GB5-J66＞
- 京都書肆変遷史編纂委員会編『京都書肆変遷史』京都府書店商業組合, 1994＜UE111-E58＞
- 小泉和子「暮らしの道具」朝尾直弘ほか編『岩波講座日本通史』13（近世3）, 岩波書店, 1994 <https://dl.ndl.go.jp/pid/13179788/1/179>
- 佐々木利和, 谷本晃久『「夷酋列像」の再検討に向けて シモチ像と「観覧」と』『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2, 2017＜Z72-M190＞
- スウェン・ホルスト「近世近衛府番長の発展」『国際社会研究 福岡女子大学国際文理学部紀要』2, 2013＜Z72-E355＞
- 内閣文庫「改訂内閣文庫国書分類目録」上・下・索引, 国立公文書館内閣文庫, 1974 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12402524>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12402525>
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12402526>
- 西村慎太郎「近世後期地下官人の有職知」『論集さんせい』29, 2007＜Z8-1507＞
- 同『近世朝廷社会と地下官人』吉川弘文館, 2008＜GB341-J36＞
- 林奈緒子「一八世紀初頭の院御所における口向の実態」『京都学・歴史館紀要』8, 2025＜Z72-R588＞
- 福田道宏「『禁裏御所御用日記』について」『近世御用絵師の史的研究』思文閣出版, 2008＜KC126-J2＞
- 藤井美紗子「藤井高尚と鐙舎」『國語國文』46（12）, 1977＜Z13-345＞
- 細谷篤志「近世朝廷の記録管理と実務組織「口向」」『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』17, 2021 <https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/records/4200>
- 松田敬之「近世期の近衛府官人（御隨身）」『花園史学』24, 2003＜Z8-1855＞
- 宮城公子『幕末期の思想と習俗』ベリかん社, 2004＜HA12-H9＞
- 明治大学刑事博物館編『明治大学刑事博物館目録』3（山城国土山家文書）, 5（土山淡路守文書）, 明治大学刑事博物館, 1953, 1954＜Z2-305＞※3号は当館未所蔵
- 「藤垣内門人姓名録」『三重県史』資料編（近世5）, 三重県, 1994 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9572208/1/513>
- 宗政五十緒 校注「有斐斎受業門人帖 二」宗政五十緒, 多治比郁夫 編『名家門人録集』上方芸文叢刊行会, 1981 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12221311/1/40>

※＜＞内は当館請求記号。

毎週木曜日、雑誌資料係では朝決まった時間になると、数名の職員が地下の書庫へ向かいます。新たに創刊された雑誌など、これまで当館に所蔵がなかったタイトルの資料（「新受け」と呼んでいます）を受け取りに行くためです。

「新受け」の資料は、受入担当の部署でデータが作られ、請求記号がタイトルごとに付与されてから引き渡されます。我々は、数年先を見越し、タイトルごとに仕切り板を使って配置場所を確保します。例えば月刊誌7年分を収めるとすると、「12カ月×7年分で84冊届く。1冊の厚さが2cmだから、84冊で168cm必要。書架の仕切り板の間隔は6cmだから6で割って、仕切り板28枚分のスペースを取ればよい。」といったことを頭の中で考えながら作業します。まさか図書館に就職して暗算力が求められるとは思わず、計算が苦手な私はいまだに苦戦しています。

計算通りにスペースを確保していても、例えば月刊誌が季刊誌に変更される、1冊の厚さが変化する、休刊・復刊するなどにより、見込みが外れることがあります。書庫内の全体的な配置は定期的に見直していますが、見直し前にスペースが足

りなくなった場合には、周囲の書架の埋まり具合を見て資料を前後に移動し、スペースを作ります。見込み違いは起きないことが望ましいものの、こうした変化の予測は難しく、最後は経験を頼りに毎度試行錯誤しています。一筋縄ではいかない作業ですが、自分が手に取って作業した雑誌が未来に残っていくと思うと、やりがいを感じられます。時には、戦前に出版された、紙が茶色くなった雑誌が届くこともあります。こうした資料は破損しやすいためそのまま書架には置かず、保存容器に格納する、製本するなどの処置が検討されます。当館が所蔵していないタイトルであれば古い雑誌でも「新受け」となるので、様々な雑誌に出会える面白さがあります。

「新受け」の雑誌には、目印として黄色いテープが挟み込まれています。もしあなたが当館に來訪して受け取った雑誌に黄色いテープが入っていたら、お手元に届くまでの道のりを思い、捨てずに資料に挟んだまま返却していただけると幸いです。

（図書館資料整備課 雑誌資料係 ペンギンブリーダー）



仕切り板は原則6cmごとに立てています。書架に3cm刻みで入っているスリットに差し込んで使います。
次週の「新受け」の書架は、写真中央の赤い板があるところから始まります。

雑誌書庫へ
ようこそ！



ギャラリー展示の できるまで



セコンド時計図 得祥館一仙 1870 【VF6-F22-31】

国立国会図書館の仕事には様々なプロセスがあります。

新シリーズ「国立国会図書館のウラ側」では国立国会図書館の業務のバックヤードを舞台裏の写真も交えて誌上でご紹介します。

第1回は、東京本館で実施されているギャラリー展示です。華やかな展示会のウラ側を支えるプロセスを覗いてみましょう。



明治三六年新略暦・旧略暦 【VF6-F8-38】



ギャラリー展示「時計と暦 堀田両平コレクション」

会場：国立国会図書館東京本館 国立国会図書館ギャラリー

会期：令和7年9月18日（木）から11月18日（火）まで

※日曜、祝日及び資料整理休館日を除く

※東京本館の利用時間・入館方法などは次のページをご覧ください。

<https://www.ndl.go.jp/jp/tokyo/index.html>

11/18 まで
開催中

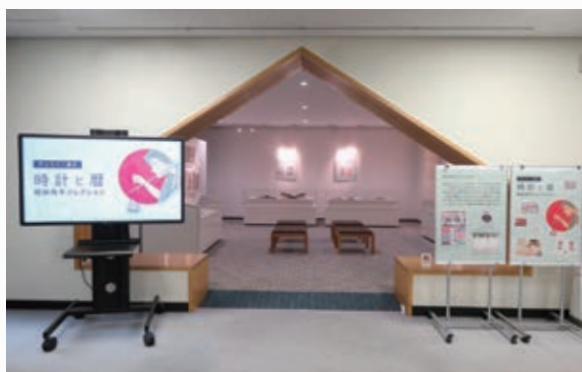


『誌上時展覧会 最新変動教材集録』9 (10) 臨時号
南光社 1920 【VF6-177】

昨年秋に国立国会図書館で開催した企画展示「ひろげて、まいて、あらわれる 絵巻の世界」はご覧になりましたか？ 国立国会図書館東京本館で開催する展示会や、電子展示会の作成を担当しているのが、展示企画係です。今年は企画展示の開催はありませんが、展示企画係は常に活動中です！ 東京本館のギャラリー展示、当館ウェブサイトで公開している電子展示会、それらを広報するSNSでの情報発信といった、いくつもの仕事を並行して行っています。今回はその中から、ギャラリー展示「堀田両平コレクション」ができるまでのウラ側をご覧ください。

(利用者サービス部 サービス企画課
展示企画係)

ギャラリー展示 と 企画展示



ギャラリー展示は、東京本館2階の本館と新館をつなぐ渡り廊下にある国立国会図書館ギャラリーで開催する常設の展示です。展示ケース4～6個に20～30点ほどの資料を展示するもので、1か月もしくは2か月ごとにテーマを替えて常に展示開催しています。図書館利用の合間に楽しんでもいただけます。

今年の5月から7月は、ミニ電子展示「本の万華鏡」と関連した「鳥と暮らしのヒストリー」の展示を、7月から9月は、終戦80周年に関連した「1945」の展示を行いました。多くの場合、ギャラリー展示に対応する電子版も作成しており、展示会終了後もインターネットから関連資料を見ることができます。



企画展示は、新館1階にある広い展示室で開催する大規模な展示です。展示室は入館ゲートより手前にあり、入館手続きなしに展示を見ることができます。開催する1年以上前から複数の部署の職員による担当チームを作って準備をし、ときには展示ケース25個に150点を超える資料を展示します。

昨年の10月から11月には「ひろげて、まいて、あらわれる 絵巻の世界」を開催しました。現在は電子版で楽しむことができます。

※令和7年度の企画展示の開催はありません。



令和6年度企画展示
「ひろげて まいて あらわれる 絵巻の世界」
<https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/emaki>



6月某日

テーマを考える

今回は、9月18日から開催するギャラリー展示のテーマを考えます。大規模な企画展示と違い、季節やその時々話題に応じて、フットワーク軽く企画できるのも、ギャラリー展示の醍醐味です。過去の展示や電子展示会を眺めたり、数か月後に話題になりそうなテーマを調べたり、面白い資料を見た記憶をたどったり、書庫を歩いたり、さまざまな方法でアイデアを探します。

今回は「堀田両平コレクション」を紹介することに決めました。色鮮やかな江戸時代の暦から、明治時代に時計が普及してきた頃の資料、時計のカatalogや販促グッズまで、バラエティに富んだ資料が含まれる楽しいコレクションで、本誌でも何度か紹介しています。それでも、これまで紹介しきれなかった貴重で華やかな資料がまだまだたくさんあり、楽しい展示がつくれそうです。

7月中旬

展示資料を選ぶ

テーマが決まると、具体的に展示資料の選定を始めます。候補資料は、資料の現物やデ



「堀田両平コレクション」を収める書庫

「堀田両平コレクション」

堀田両平コレクションとは、堀田時計店の社長であった堀田良平氏（1913-1989）が収集した、時計や暦、宝石に関する資料約6千点のコレクションです。

※本名は堀田良平ですが、昭和26（1951）年以降は「両平」を多く使っているため、当館は「堀田両平コレクション」としています。

参考：

- ・リサーチ・ナビ「堀田両平コレクション」 https://ndlsearch.ndl.go.jp/rnavi/plan/post_1221
- ・河合将彦「あの人の蔵書（第3回）堀田両平コレクション」（『国立国会図書館月報』710, 2020.6, pp.24-28）
https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11488852_po_geppo2006.pdf?contentNo=1#page=26

デジタル画像を見たり、参考文献を調べたりして選んでいきます。今回は堀田両平氏から寄贈された約6千点のうちの大半を管理し、内容を熟知している部署の職員にも、資料を選ぶ手伝いをしてもらいました。書庫に収められた資料を見ながら、カード目録や冊子目録を参考にして、およそ40点の候補資料を選びます。

国立国会図書館は膨大な資料を所蔵していますが、存在が広く知られてない資料も数多くあります。また、大半の資料は閉架式の書庫にあるため、資料を偶然手に取れる機会は限られています。デジタル化の進展により、画像データで閲覧する資料も増えていますが、ギャラリー展示は、利用者が新たな資料と出会える場所であり、現物を実際に目にすることで資料の大きさや質感といった点まで楽しんでいただける貴重な機会を提供する場でもあります。

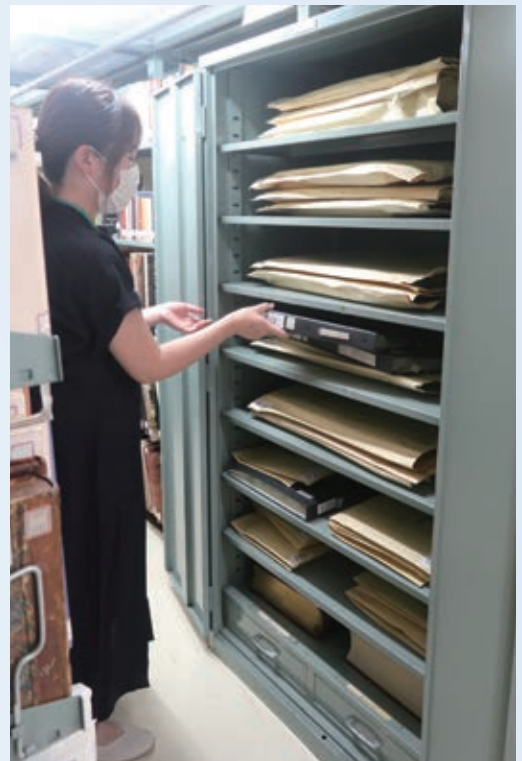
7月末

展示資料を絞り込む

展示の完成像をイメージしつつ、候補資料を、会議室のテーブルに並べていきます。色鮮やかな引札曆から、明治時代の図書、百年以上昔の貴重な洋書、時計関連カタログ、豆



「堀田両平コレクション」のうち洋書



暦など1枚物の資料は書庫内のキャビネットに平置きされており、クリアフォルダに収められている資料もあります。



堀田両平コレクションの多くは、今は目にする機会が少なくなったカード目録で検索します。

本まで、バラエティに富んだ資料が候補となりました。これらを展示ケースにちょうど収まる量（今回は展示ケースを5個使用）にまとめる必要があります。時代ごとにわけると、テーマごとにするのか、どのページが見栄えがするのか等々、展示の構成を考えながら、資料を絞り込んでいきます。資料保存の観点から、展示資料や展示箇所を会期中に替えることもあります。また、一枚ものの資料ならば全体を展示できますが、冊子の場合は全体のうちの1箇所しか展示できません。展示するページを厳選するのも悩ましい作業です。

今回は東京本館にある資料だけを使い、したが、テーマによっては関西館や国際子ども図書館の資料を取り寄せて展示することもあります。

この日、2時間以上かけておよそその出展資料は固まりましたが、その後も新たな資料を追加したり、会期中に入れ替える資料を決めたりといった検討を進め、すべての出展資料が確定するのは8月末になりました。

8月～展示作業前日

名票や解説パネルの作成

資料を並べるだけでは展示会にはなりません。



色鮮やかな引札暦

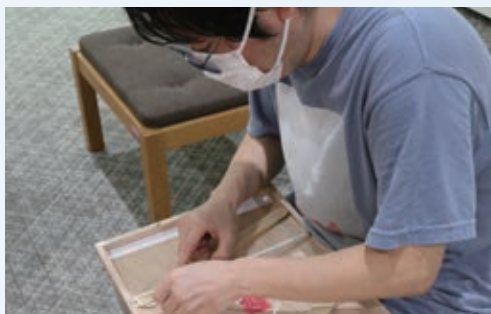


資料を並べて展示の構成を考えます。

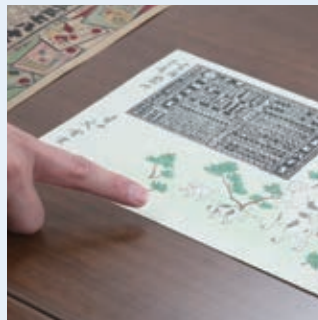


ん。出展資料が決まると、書誌事項等を書いた名票や、壁に掛ける解説パネルの作成を開始します。参考文献にあたりながら原稿を書き、その後はわかりやすい説明ができているか、誤っている箇所はないか、長すぎないか、複人数で入念に確認します。名票やパネルのデザインも、展示内容に合うように考えます。解説パネルの原稿が完成したら、Aーサイズまで印刷できる大型プリンタで印刷します。壁面には、解説パネル以外にも、資料保存の観点からギャラリーには展示しない古典籍資料等の画像を、国立国会図書館デジタルコレクションから印刷して額縁等に入れて展示することもあります。こうした壁面の工夫で、展示会の印象が大きく変わってきます。また、会場入り口には紹介動画を流す大型モニターを設置するため、その動画の作成も行います。

資料の展示準備や掲示物の作成と並行して、電子版の作成も進めます。展示資料の多くがデジタル化されている場合には、資料の内容を読むことができるものになりますが、今回の堀田両平コレクションは、国立国会図書館デジタルコレクションの収録資料が少ないため、資料の一部の画像を掲載することにも、展示会終了後に参照できるよう、出展資料のリストを付しています。



パネルの印刷と、額装をする様子



電子版コンテンツ

https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/gallery_exhibitions/202509



展示候補の資料

1,2 特許証 3317 号 時計 1899 【VF6-F23-12】 / 3 大正二年休暇表 【VF6-F10-64】 / 4 スミット著 神田孟格訳『星學圖彙』【星學図説別冊】 紀伊国屋源兵衛 [187-] 【VF6-W55】 / 5 明治十九年略暦 【VF6-F5-23】 / 6 峯村幸造『明治の時計 少雨狂句集』書苑往来社 1965 【VF6-M27】

4	1
5	2
6	3

9月17日

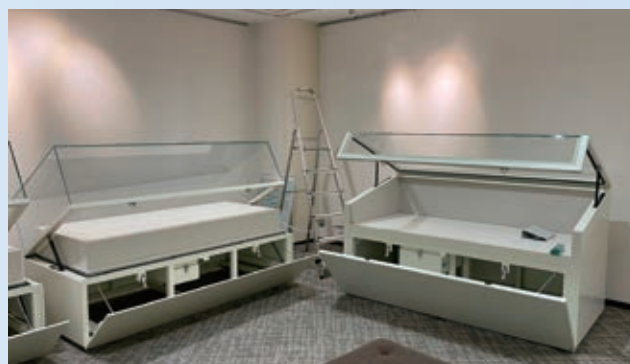
休館日に1日かけて展示替え作業

国立国会図書館東京本館の資料整理休館日は毎月第3水曜日です。ギャラリー展示の展示替えはこの1日で行うため、当日は朝から一気に、前日まで開催していた「1945」の撤去から「堀田兩平コレクション」の設置まで行います。

まず、これまで展示していた「1945」の資料や解説パネルを撤去します。メディアの取材もあり、多くの利用者にご覧いただいた展示で名残惜しい面もありますが、1時間たらずで、ギャラリーはカラになりました。

続いて、展示ケースを移動して会場レイアウトを変更してから、壁面にパネルを掛けていきます。並行して、展示資料をギャラリーに運び込み、展示ケースに入れていきます。資料のそばには書誌事項を印刷した名票を置きます。ページを開く資料の下に支持台を置きます。ページを傷めないような工夫もします。

照明の調整も重要です。資料に強い照明を当てると退色や紙の劣化が起こるおそれがあるため、強い光が当たらないよう、かつ見やすいように、調整します。このほか、会場入



前回のギャラリー展示を撤収し空になった展示ケース



資料を慎重に並べていきます。



壁面の展示やパネルのセッティングも行います。

口の看板にあたるパネルを掲示したり、大型モニタに流す動画を確認したり、場合によっては、ちらしの準備や、プロジェクターの設置も行います。

一通りの作業が終わった後も細かい調整を続け、夕方にはなんとか展示作業が終了し、職員にお披露目となります。楽しみにしている職員が足を運んでくれたりします。

9月18日

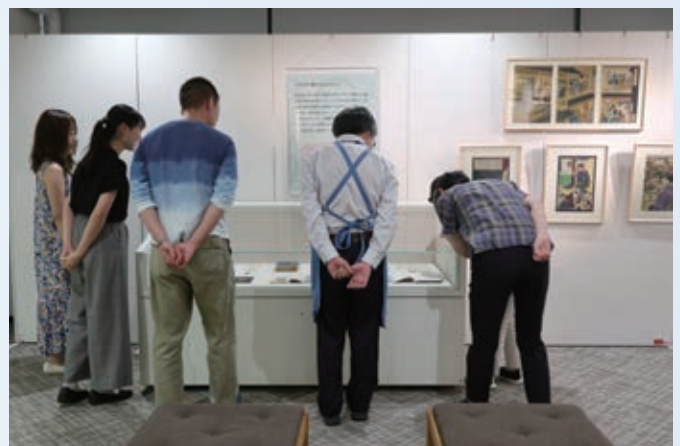
ついに展示初日！

休館日翌日の朝は、大型モニタの電源を入れ、展示ケースのガラスを拭いて最終調整。そして開館時間の9時半を迎え、ついに展示が始まります。SNSでの宣伝も行い、「多くの方に見ていただけますように」と祈ります。電子版がある場合は、そのページも公開します。

調べ物の合間に、複写を待つ時間に、ギャラリを少しのぞいてみてください。未知の資料との出会いがあるかもしれませんよ。



無事に展示作業が終了しました。



職員による観覧の様子

国立国会図書館法では、国民に対する奉仕の一つとして、展示が定められています。^① 国立国会図書館では、昭和23（1948）年の開館当初から展示を行ってきました。ここでは、東京本館の展示の歴史を簡単に振り返ります。

最初の展示会は、開館した年の11月1日から8日まで開催された「文化日本記念地理展覧会」です。文化の日（11月3日）の制定や10月27日から2週間にわたって展開された読書週間にあわせて、他機関等の協力も得て、地図や地形模型、航空写真、古典籍等を展覧したものでした。^② その後はおよそ毎年、近年は2年に1回、企画展示として大規模な展示会を開催しています。

一方、昭和56（1981）年からは、小規模な展示である常設展示が行われるようになり、平成20（2008）年まで続いていました。平成21（2009）年からは小規模な展示はミニ電子展示「本の万華鏡」に引き継がれ、実物の資料の小規模な展示はしばらくの間行われなくなります。

現在のギャラリー展示は令和3年3月に始まりました。なお、このスペースは従来喫煙室でしたが、改正健康増進法の施行により喫煙室を廃し、跡地の活用を検討した結果、国立国会図書館ギャラリーが移転・開室し、資料を展示できるスペースとして生まれ変わったものです（旧国立国会図書館ギャラリー（新館1階）は、平成29年5月に開室し、国立国会図書館の歴史や事業を紹介していました）。折しもコロナ禍で入館者数を制限しており、多くの人には見て

国立国会図書館東京本館の展示の歴史

もらいにくいタイミングでしたが、そんな中でも徐々に認知度が上がり、多くの来館利用者の方に訪れていただけのようにになりました。

企画展示・ギャラリー展示という資料実物の展示とは別に、平成10（1998）年からは、電子展示会が始まりました。最初の電子展示会は「デジタル貴重書展」で、当時の国立国会図書館にとっては、資料のデジタル画像を提供する唯一のサービスでした。その後、資料のデジタル化は大幅に進み、8月現在では478万点を超える資料が国立国会図書館デジタルコレクションで提供されています。この膨大なデータの利活用を進めるという意味でも、電子展示会は重要な存在となってきました。

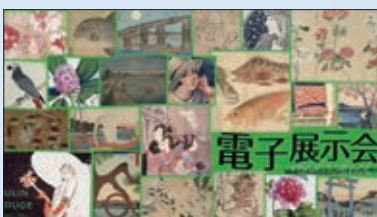
例えば、令和4年3月に公開した「NDLイメージバンク」は、親しみやすい画像を楽しんでいただくだけでなく、活用されることも意図した電子展示会です。著作権保護期間が満了した9千点を超える画像を収録しており、商用利用を含め画像を利活用できます。また日本の風景や季節の風物詩といった様々なコラムもあり、読み物としても楽しめます。

これからも、現物展示ならではのリアリティと、電子展示ならではの利便性をそれぞれ活かし、当館資料の魅力を伝えていきたいと思っています。

また、関西館や国際子ども図書館でも年に数回展示を行っています。こちらもあわせてお楽しみください。

- 1 国立国会図書館法（昭和23年法律第5号）第21条第1項第1号
- 2 『文化日本記念地理展覧会陳列品目録 地図と模型』国立国会図書館、1948 <https://dl.ndl.go.jp/pid/2974890/>

※【 】内は当館請求番号



国立国会図書館の電子展示会のページ
https://www.ndl.go.jp/jp/d_exhibitions/

本屋に

ない本



『明治東京の書生社会』

鈴木鹿之介在京日記の世界』

中野目徹 監修 燕市刊 2024.12

326 p ; 19 cm

<請求記号 GK199-R1214>

虎雄^{とらお}は後に文化勲章を受章する漢文学者となった。

監修者中野目徹氏は、鹿之介から虎雄への「教育的、人格的継承の可能性を看取」し、上京して書生社会に加わった青年たちが「開化の風俗や最新の学問」を各地にもたらした「日本社会全体が活性化されていく」「近代化のダイナミズムのようなもの」を読み取ることで、貴重な史料と解説する。まず解説を読んでこの時代の雰囲気や理趣を解すれば、鹿之介の行動や苦悩の意味もより深く感じられるであろう。なお、同じく中野目氏監修の『日記で読む長善館 鈴木家三代の幕末〜明治』（燕市、2021年刊）も一読をお勧めしたい。

本書は、天保4（1833）年から明治45（1912）年までの80年間、越後国・新潟県^{あおづむら}の粟生津村（現燕市）に存続した著名な私塾長善館^{しかりん}の2代館主である鈴木惕軒^{てきけん}の次男鹿之介（1861〜1887）が東京遊学中に記した日記を翻刻し、監修者の解説を付したものである。

兄が早世した鹿之介は、長善館の後継者として育てられ、明治10年に上京、近藤真琴^{まこと}の私塾攻玉社^{こうぎょしゃ}に入門した。11年から始まる在京中の日記には「日課終リテ帰ル。（略）夜笹山氏^{ささやま}に至リ新聞紙ヲ閲ス。輿地史略語読、英語綴復読。十時半帰リテ臥ス」（11年2月14日）などの日常が記されている。

勉学^{まけん}にうちこむ姿は、12年4月に中村正直^{なかむらなほ}の私塾同人社に転学した後

も変わらない。たとえば、終業後も「高青邱詩鈔」^{こうせいきゅう}「古文典刑」^{こぶんてんけい}を読み、夜には「英書」を「復読」し、「羅馬史」を読む（14年4月8日）。作詩・作文・習字にもいそしみ、友人や親族と交流するほか、東京図書館で読書し（14年2月6日等）、上野動物園に赴き（15年4月10日）、撃剣興行（剣術試合の見世物）^{さんゆうていえんちやう}を見（12年8月13日）、三遊亭円朝^{さんゆうていえんちやう}の人情噺を聞く（17年1月19日）。とはいえ春木座の前では、「其劇場ナルニ心付カズ、軒端^{けんぽう}□掲ケ連ネタル提灯ヲ見、以テ祭礼トセリ」（17年9月29日）と記す真面目な書生ぶりであった。

遊学が長くなるにつれて、鹿之介は勉学への悩みを深めていったらしい。「吾ハ漢学も英学も少々づゝ喫かけ、

古事記の一行も見た事あらねば、随て雑駁極まる思想が胸中に浮む」（17年7月10日）といった言語と思想をめぐる胸中の吐露が増えている。そうしたなか、東京大学文学部専科進学を目指した鹿之介は、英語力修得のため18年1月、東京英和学校（現青山学院大学）を受験したが、「余聞教師所言頗不能解之」（9日）、つまり教師の言葉をヒアリングできず、不合格となった。

不得意な英語を克服できないまま、鹿之介は、「牛ヲ食シ新聞ヲ読ミ珈琲ヲ喫スル等頗ル書生不相当ノ挙動」（18年3月12日）を悔悟しつつ、4月、進学を断念して帰郷し、長善館で門弟の指導にあたることにする。その2年後、鹿之介は死去するが、長善館は次の弟彦嶽^{ひんがく}に引継がれ、さらに末の弟

（大沼 宜規）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

憲政資料室の新規公開資料から

国立国会図書館は、近現代の政治家、官僚、軍人らの所有していた個人文書を集めた「憲政資料」（約四六万点）を所蔵しています。このたび東京本館憲政資料室で新規に公開した資料をご紹介します。

憲政資料は、主にご子孫などからの寄贈によって収集した資料から構成されており、整理や目録作成を経て一般に公開されています。政治史をはじめ様々な分野の調査・研究を支える貴重なコレクションの魅力の一端を味わっていただければ幸いです。

（利用者サービス部 政治史料課）

西郷従道来簡集

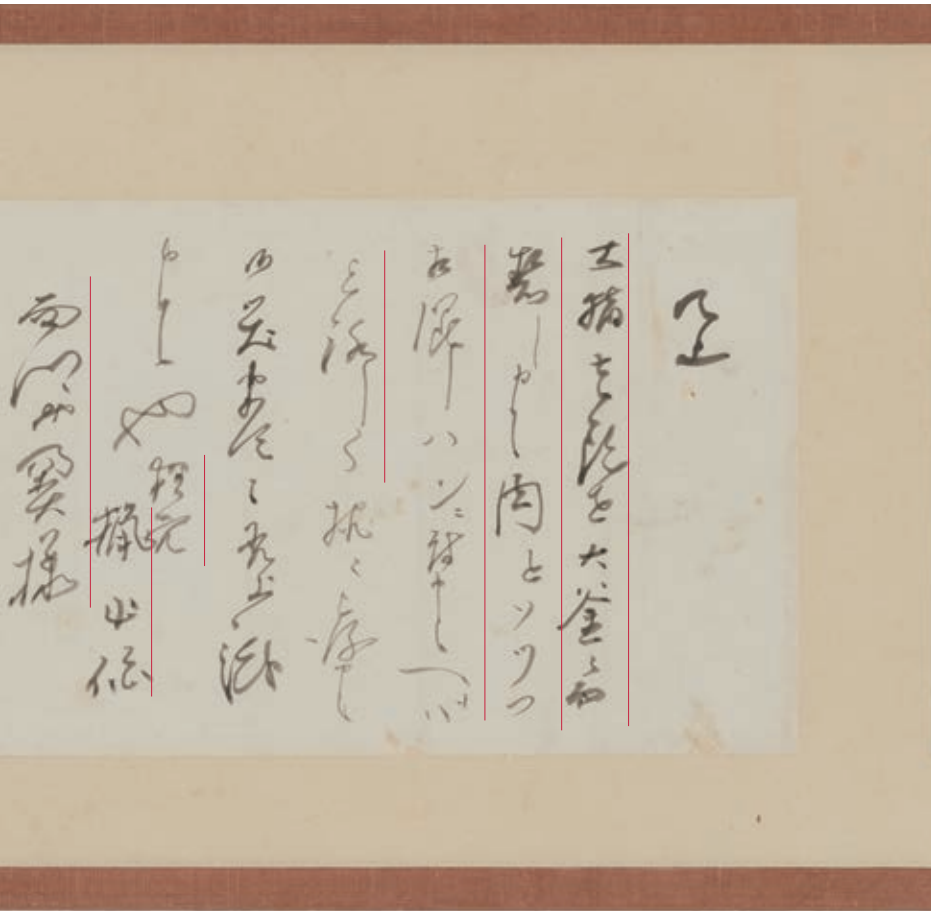
（憲政資料室収集文書四三三二）

（三四点 令和七年五月公開）

三巻（資料合計三四点）で構成される本資料は、うち三点を除くほとんどが西郷従道家へ宛てられた書簡を貼り交ぜたものです。西郷宛ての書簡集といえば、「西郷従道家書翰帖」（東京大学史料編纂所蔵）^{〔1〕}が思い浮かびますが、これは西郷没後一〇年目にあたる明治四五（一九一二）年、未亡人の清子がおそらく形見分けとして、西郷宛ての書簡を折本に仕立てて子孫と親戚に分与したものです。今回の新規公開資料は、「西郷従道家書翰帖」には

ない新出史料であり、清子による分与以前に散逸したものと思われるます。中でも写真¹は興味深いものです。これは「狸穴^{まみあな}狐山伯」から「西郷御奥様」に宛てられたものです。内容は「大猪は頭を大釜ニ而製し申し候肉とソツフ相混し、ハンに付申し候へはよろしく」と大猪の料理法を伝えたもので、追伸部分では逆にいただいた山鳥二羽のお礼を伝えています。

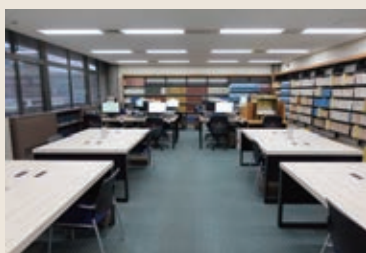
問題は、この「狸穴狐山伯」が誰



憲政資料室のご案内（東京本館 本館4階）

「憲政資料」のほか、第二次世界大戦終了後の連合国による日本占領に関する米国の公文書を中心に集めた「日本占領関係資料」、主に北米・南米への日本人移民に関する資料を集めた「日系移民関係資料」を扱っています。

憲政資料室の利用方法、所蔵資料の概要については、国立国会図書館ホームページ「憲政資料室」(<https://www.ndl.go.jp/jp/tokyo/constitutional/index.html>)、今回紹介する資料を含む憲政資料の概要については、リサーチ・ナビ「憲政資料（憲政資料室）」(<https://ndlsearch.ndl.go.jp/navi/kensei>)をご覧ください。



憲政資料室

西郷従道（1843-1902）

天保14（1843）年鹿児島生まれ。西郷隆盛の実弟。名の読みはじゅうどう／つぐみち。薩英戦争や鳥羽・伏見の戦いに従軍した。明治新政府に出仕、征韓論政変後は兄と袂を分かって政府に残留した。明治7（1874）年には台湾に出兵。西南戦争後、参議兼文部卿などを歴任した。内閣制移行後も第1次伊藤博文内閣の海相などを務めた。明治35（1902）年死去。

肖像写真の典拠：[太政官高官肖像写真帖]＜憲政資料室収集文書1357＞



1 複製版が『島津家文書マイクロ版集成 島津家本 東京大学史料編纂所蔵』東京大学出版会、[2002] <YE1-8>に収録（リール番号：島津家本〇二一九・〇二二〇）

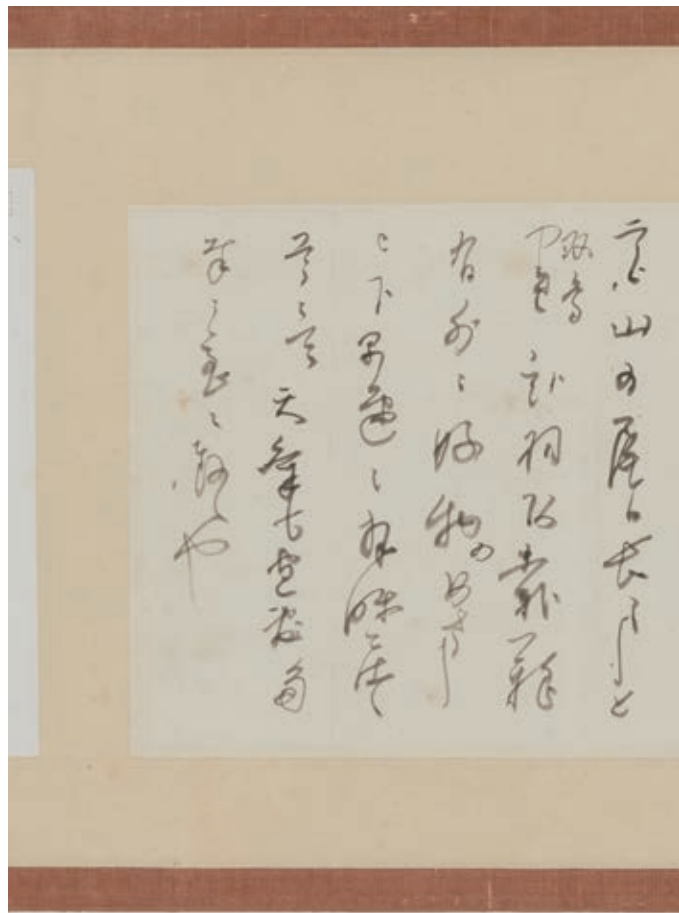


写真1 川村純義書簡 西郷清子宛 年月日不明
＜憲政資料室収集文書433-3-10＞

かということ。西郷は狩猟を趣味にしている、狩猟仲間には大久保利通や川村純義すみつぎなどがいました。うち川村は東京麻布狸穴町に居住していたうえ、爵位も伯爵ということから、川村であると推測しました。いうまでもなく、「獵山伯」は「梁山泊」にかけています。

そのような観点で「西郷従道家書翰帖」を見直してみますと、川村が出張先の伊勢で狩猟をして獲た猪を西郷へ贈り、樺山資紀かばやしけいと分配するよう求める書簡などがありました。新出史料が既存史料の見直しにもつながる典型といえるでしょう。

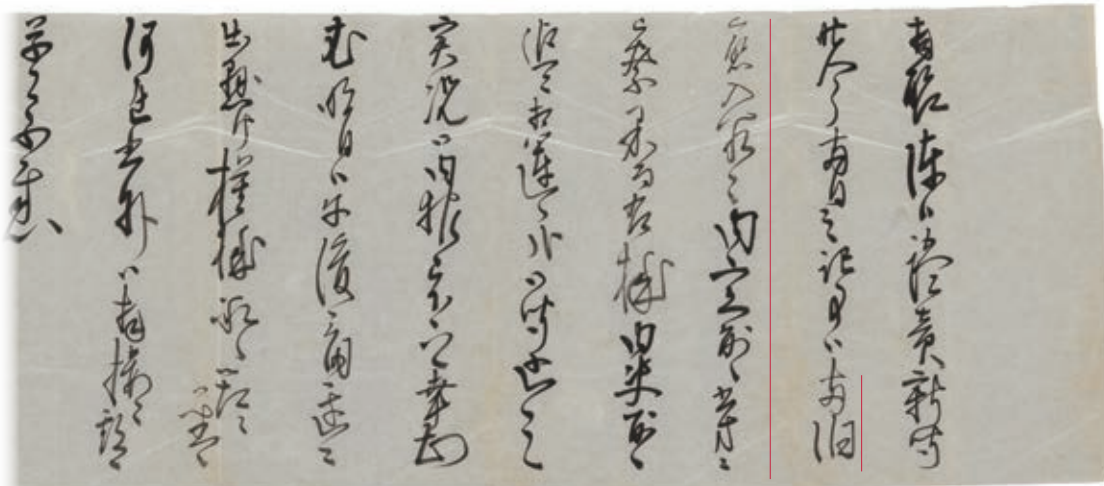


写真2 藤島正健書簡 阿部充家宛 [明治29年] 8月17日 <阿部充家関係文書380>
傍線部分には「両伯愈(いよいよ)入閣二内定致候出方」とある。

阿部充家関係文書(第三次収集分)

(三三三三 令和六年一〇月公開)

憲政資料室では、過去に二度にわたって阿部充家関係文書の寄贈を受けて利用に供してきましたが、このたび約三〇年ぶりに三度目の寄贈を受けました。

その第三次収集分の資料三三三三のうち、藤島正健^{まさたけ}から阿部充家への書簡が二〇点を占めます。藤島は、明治期に大蔵官僚から転じて富山や千葉の県知事を務めた後、日本勧業銀行(現在のみずほ銀行のルーツの一つ)の創設時に副総裁となった人物です。対して、阿部は、国民新聞(現在の東京新聞の前身の一つ)の記者として長く活動しました。

藤島の書簡を通覧すると、ほぼ毎回と言ってよいほどに、政界の事情に関する情報提供の依頼や御礼が記されています。あわせて、藤島からも自身の観測や情報を阿部へ書き送っていることが分かります。

特に、明治二九(一八九六)年九月一八日の第二次松方内閣発足の前には連絡を重ねています。八月一七日には、前日の『読売新聞』の記事を受けて、大隈重信と松方正義の入

閣が内定しそうであることを記しています(写真2)。続けて、八月二〇日には、首相更迭となれば松方が後任となるだろうという、政府部内の事情に通ずる知人の見込を伝えていきます(次頁写真3)。さらに、九月八日には、首相問題は元老たちから西郷従道に相談中の模様であると、動向を知らせています(次頁写真4)。

これらの書簡が書かれた時期を含む明治二六(一八九三)年四月から明治三〇(一八九七)年六月にかけて、藤島が要職に就いていたという記録は見当たりません。そのためか、また別の書簡には、要職に就けるように仲介を依頼する内容も含まれています。

このように、新聞記者として政治家との関わりを持ち、政界の事情にも通じている阿部は、官界で主に活動していた藤島からも頼りにされていたことがうかがえます。

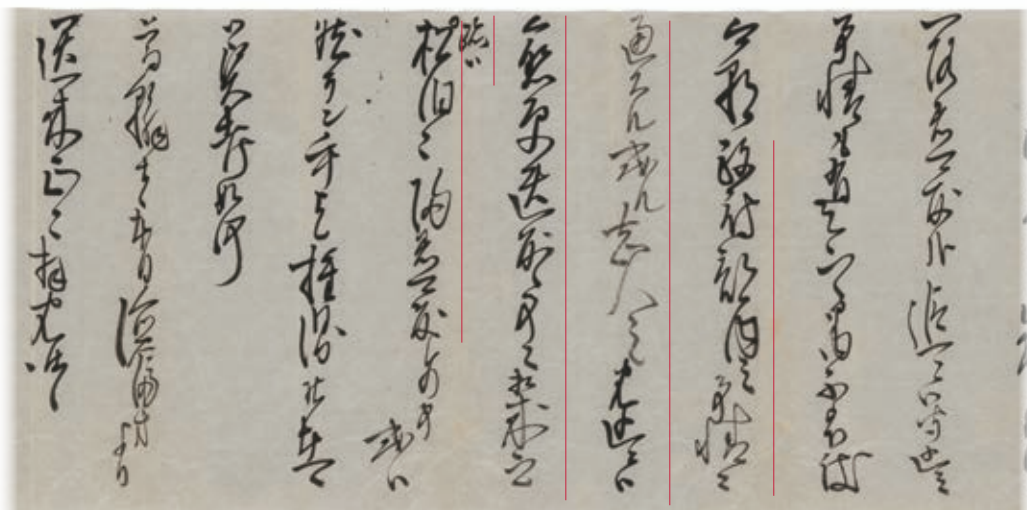


写真3 藤島正健書簡 阿部充家宛〔明治29年〕8月20日 <阿部充家関係文書366>
傍線部分には「政府部内之事情二通スル或ル知人之見込二ハ愈更迭致候事二相成候ハ、跡ハ松伯二帰着可致」とある。

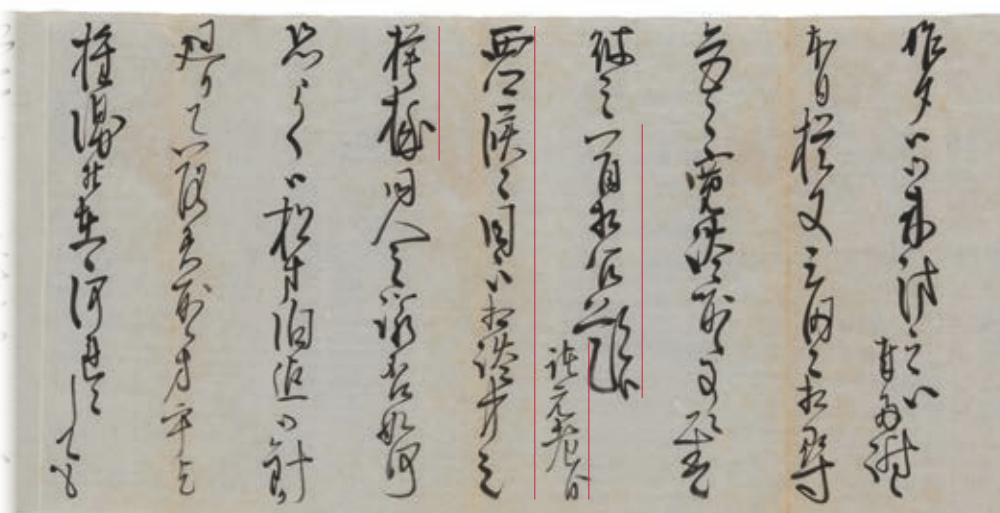


写真4 藤島正健書簡 阿部充家宛〔明治29年〕9月8日 <阿部充家関係文書367>
傍線部分には「首相問題諸元老より西郷侯二目下相談中之模様」とある。

阿部充家（1862-1936）

文久2(1862)年熊本生まれ。国民新聞社で記者として活動し、明治44(1911)年には同社副社長、後に顧問に就いた。大正4(1915)年から大正7(1918)年には京城日報社長を務め、朝鮮事情通として寺内正毅・斎藤実両朝鮮総督に助言を行った。昭和11(1936)年死去。

肖像写真の出典：『朝鮮公論』2(9), 1914.9
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/11186887/1/54>)



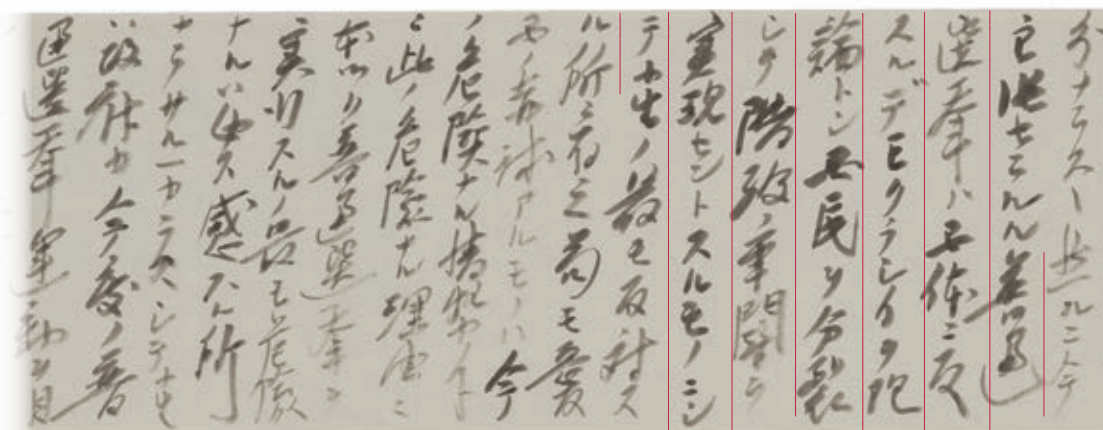


写真5 上杉慎吉書簡 宛先不明（大正9年）3月30日 <憲政資料室収集文書416-6>

森鷗外・徳富蘇峰等書簡巻（憲政資料室収集文書四二六）

（巻 令和六年二月公開）

この資料は、森鷗外、徳富蘇峰、水野錬太郎等明治期～昭和戦前期に活躍した政治家、官僚、作家、学者の書簡二三通をまとめたものです。

そのうちの一通に、天皇主権説を唱えた憲法学者上杉慎吉の書簡（宛先不明 三月三〇日）があります。

この書簡で上杉は、「普通選挙ヲ標榜シテ、実ハ国家ノ基礎ヲ揺撼スルヲ憚ラサルノ徒」（普通選挙を標榜しながら、実は国家の基礎を揺撼すことを憚らない人々）に對抗

動かすことを憚らない人々）に對抗する大会への出席に意欲を示し、執筆時に主張されていた普通選挙について、「国体ニ反スルデモクラシイヲ理論トシ、国民ヲ分裂シテ階級争闘ヲ実現セントスルモノ」であるため、「最モ反对スル所」であると、強く反対を表明しています（写真5）。

一方、書簡で上杉は、自らの「普通選挙ヲ行フヘキ了見」にも触れており、普通選挙そのものには賛成しています。ただし、本人の著作によれば、賛成理由は、国民が力の一つ

にして天皇と協力し（「国体の精華の發揮」）、国民全体が衆議院に参加して国策を推進するべきである（「挙国一致」）というものであり、「階級争闘」とみなす普通選挙運動とは動機を異にしていました。そのため、書簡において上杉は、政府が当時の普通選挙運動を国家社会の脅威とみなし、衆議院解散によって対抗したことにすら賛同を示しています。

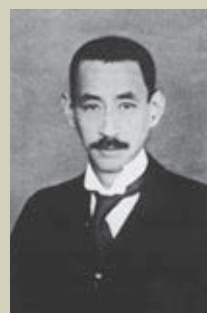
書簡には執筆年の記載はありません。しかし、次の二つの根拠から大正九（一九二〇）年のものと推定が可能です。第一に、この年、普通選挙法案の審議中に衆議院が解散されています。第二に、上杉は普通選挙を説く著書で、大正九年に普通選挙阻止の活動をしたことを告白しています³。

その後、普通選挙運動は一時停滞し、選挙法の成立は大正一四（一九二五）年を待つことになりました。上杉は、普通選挙法成立後、今度は普通選挙の精神普及のために活動しています。

上杉慎吉（1878-1929）

明治11（1878）年福井生まれ。明治36（1903）年に東京帝国大学法科大学を卒業し、翌年助教に任官した。明治39（1906）年にヨーロッパに留学し、帰国後、天皇主権説を唱え、天皇機関説を唱える美濃部達吉らと激しい論戦を展開した。大正元（1912）年に教授となる。昭和4（1929）年死去。

肖像写真の出典：『国家学会雑誌』43（5）、1929.5（<https://dl.ndl.go.jp/pid/10219377/1/2>）



- 上杉慎吉「国体の精華を發揮するの秋」『中央公論』34（1）、1919.1、p.102 <Z23-9>
- 上杉慎吉『国体精華乃發揚 真正日本乃建設・挙国一致乃提唱』洛陽堂、1919、p.303. <https://dl.ndl.go.jp/pid/1908219/1/162>
- 上杉慎吉『億兆一心の普通選挙』中央報徳会、1926、pp.序文1-3 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1019417/1/3>
- 松尾尊兌『普通選挙制度成立史の研究』岩波書店、1989、pp.189-191 <AZ-251-E153>

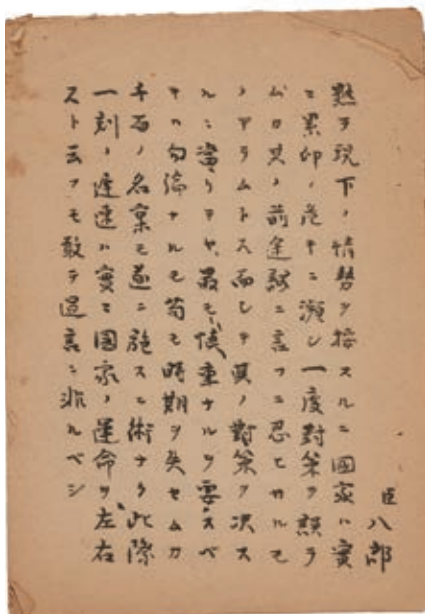


写真7 上奏（写）＜有田八郎関係文書104＞
表紙と冒頭のページ

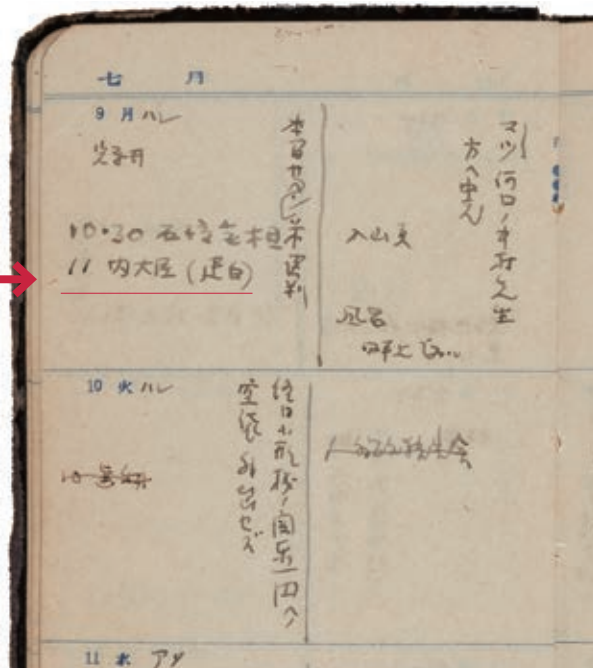


写真6 〔手帳（昭和20年）〕＜有田八郎関係文書63＞
7月9日のページ

有田八郎関係文書

（二六七点 令和七年五月公開）

外交官の出身で昭和前期に外務大臣を務めた有田八郎は、戦後になってから回想録といえる『人の目の塵を見る 外交問題回顧録』（大日本雄弁会講談社、一九四八）や、『馬鹿八と人はいふ 一外交官の回想』（光和堂、一九五九）を出版しています。

このようにユニークなタイトルをつけて過去を振り返って回想をあらわした人物の手帳には、一体どのようなことが書かれているのか、同時代への意見や思いが多く書かれているのではないかなどいろいろと興味がわきます。実際に開いてみると、個人の感想は書かれておらず、大変に簡素なものでした。例えば、昭和二〇（一九四五）年七月九日に、戦争の状況を分析して早期の講和を行うように記した上奏文を木戸幸一内大臣に託した時の記述について

田八郎氏来室、時局に対する上奏書云々なり」（木戸日記研究会校訂『木戸幸一日記 下』東京大学出版会、一九六六）と簡潔に記しています。

この上奏文は二冊の回想に翻刻収録され、内容はすでに知られています。今回ご子孫から寄贈された文書中には、この上奏文の控えを影印（複製した印刷物）にしたもの（写真7）も残されていました。当時、還暦を超えた有田八郎の筆跡をうかがうことができます。他にも、寄贈資料の中には昭和二〇年八月七日付の木戸幸一の書簡草稿の影印版（資料番号一〇七）が残されており、こちらは、その元となった現物（資料番号一〇八）も一緒に残されていました。

有田八郎が二冊の回想を執筆する際には、上奏文の控えなどの資料を手元に置いていたのでしょうか。また、記載の簡素な手帳は時期の確認や記憶を思い出す際のインデックスとして用いられたのかもしれないと、資料の残り方を見ると、いろいろな想像が広がります。また、手帳

には簡潔に日々の記載があり、有田八郎をめぐる人的交流の動向など様々な角度からも参考になりうるでしょう。

有田八郎（1884-1965）

明治17（1884）年新潟生まれ。外交官を経て、昭和前期、広田、近衛、平沼、米内の各内閣で外務大臣を務め、日独伊三国同盟には反対であった。戦後、公職追放解除後に衆議院議員に当選。東京都知事に立候補するも落選。小説『宴のあと』の執筆者三島由紀夫と新潮社を「プライバシー侵害」にあたるとして告訴。昭和40（1965）年死去。

肖像写真の出典：有田八郎『私の見る再軍備』朝日新聞社、1952
(<https://dl.ndl.go.jp/pid/2995841/1/5>)



坂田道太^{みちた}関係文書

(二五七九点、令和七年五月公開)

坂田道太は、戦後初の衆議院議員総選挙で当選して以来、四〇年以上にわたって政界で活躍した政治家です。昭和四三(一九六八)年から昭和四四(一九六九)年にかけての東大紛争時の文部大臣としてよく知られますが、他にも自由民主党政権において要職を歴任しました。書架延長三一メートルに及ぶ膨大な文書を、坂田自身(もしくは秘書)による整理方法にも注目しながら紹介します。

◆書類(写真8左)

様々な形態の書類のうち、ファイルに綴じられた資料には、最初のページに目次が綴られたものが多くあり、ファイル

の中身が探しやすいようによく整理されていたことがわかります。また、文書全体の中には、「国立国会図書館」の台紙に貼られた切抜なども散見され、当館を利用して文献を調査していた形跡をうかがうことができます。

◆報道資料のスクラップ(写真8中央)

報道や記事の切抜を集め、一枚ずつ紙に貼り込んで製本した、防衛庁長官在任時の大きな冊子(資料番号七一九)が残っています。就任直後の約二か月分の冊子は厚さ一センチもありますが、分厚過ぎたのか、翌月からはおよそ一か月分ごとに製本されています。

◆カード(写真8右・写真9)

文書の中には、情報を整理するためのカード(小さめのメモ帳や、最大でA5サイズ弱位のカードなど)が多く残されていました。内容は、記事の切抜や図書のコピーを貼りこんだもの、読書記録、国会答弁内容のコピー、面会や行動の内容メモなど、多岐にわたります。

大量の文献収集の跡、整理の丁寧さ、そして手書きの筆跡の驚くべき量からは、多忙な中でも学ぶことを怠らず、真摯に職務に向き合った姿勢が見えるようです。

坂田道太(1916-2004)

大正5(1916)年、熊本生まれ。政治家・教育者の坂田道男の長男。東京帝国大学文学部独文科卒業後、第22回衆議院議員総選挙以降、通算17回連続当選。石井光次郎商工大臣秘書官を経て、厚生大臣、文部大臣、防衛庁長官、法務大臣、衆議院議長。平成16(2004)年死去。

肖像写真の出典:『衆議院要覧 昭和55年8月編 乙』衆議院事務局, 1980 <BZ-1-11>



写真8

(左) 書類のうち、ファイルに綴じられた資料の例。冒頭に目次ページがある。[シビリアンコントロール 13] <坂田道太関係文書495>

(中央) [[記事切抜] 防衛庁関係報道資料 自昭和49年12月 至昭和50年1月] <坂田道太関係文書719>

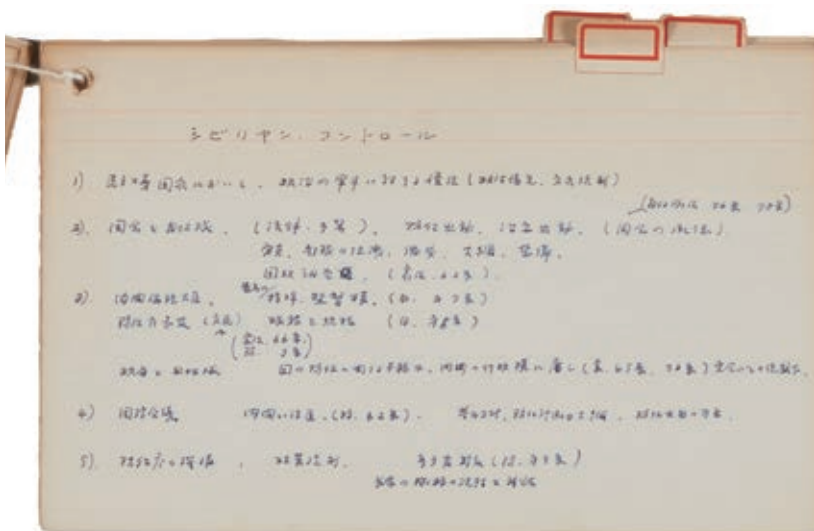
(右) [[カード(郷里)]] <坂田道太関係文書1204>

専用のケースに入ったカードの例。主題ごとに、見出しがつけられています。

写真9 「シビリアンコントロール」の見出しの中にある、カードの1枚。[カード] <坂田道太関係文書691>

ブルーやブラックのインクで書かれた、カードの中で最もよく見られる筆跡は坂田道太本人のものと推測されます。

ちなみに一枚めくった次のカードには、表には、ある事典の「シビリアン・コントロール」の条、裏には「文民」の条をコピーしたものが貼られています。



第18回科学技術情報整備審議会

7月17日、第18回科学技術情報整備審議会がハイブリッド方式で開催され、審議会委員・専門委員12名のほか、館長、副館長、幹事等職員17名が出席しました。第六期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画策定に向けた提言案を検討するために設置された基本方針検討部会において作成した提言素案について、野末部会長から報告した後、議論を行いました。委員からの提言素案についての主な意見は次のとおりです。

- ・幅広い内容を取り上げ、よくまとまっている。研究者等に限られない幅広いユーザに国立国会図書館の知識基盤へのアクセスを提供する役割が再確認できている。18歳未満の利用者を視野に入れていることも意義深い。
- ・我が国の研究成果が海外プラットフォームで公開されることも多くなっているが、その情報基盤の不安定さも懸念される。ウェブサイトの国ごとのバルク収集を国立図書館が担っている事例もある。国立国会図書館の収集範囲をいま一度検討すべきである。
- ・人々が自ら情報源を確認しつつ知的活動に従事することに幼少期から慣れることが今まで以上に重要になっており、国立国会図書館の知識基盤はまさにそれを可能にするものである。情報探索の初心者向けの入り口を増やすことをさらに検討してはどうか。また、地域資料の活用への関わりについても言及が必要である。
- ・国立国会図書館が関与するジャパンサーチは、我が国にとって重要な取組なので、しっかり書くべきである。

今回の審議会での意見等を踏まえ、さらに部会で検討し、今年度中に開催する第19回審議会において、提言がとりまとめられる予定です。

科学技術情報整備審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和7年7月17日現在)

委員長

安浦 寛人

九州大学名誉教授

委員長代理

竹内 比呂也

千葉大学副学長
附属図書館長、アカデミック・リンク・センター長

委員

浅川 智恵子

日本科学未来館館長

池谷 のぞみ

慶應義塾ミュージアム・コモンズ機構長
慶應義塾大学文学部教授

大隅 典子

東北大学経営戦略本部アドバイザー
大学院医学系研究科教授

黒橋 禎夫

情報・システム研究機構国立情報学研究所長

小口 正範

日本原子力研究開発機構構理事長

戸山 芳昭

国際医学情報センター前理事長

野末 俊比古

青山学院大学教育人間科学部長・教授
科学技術振興機構理事長

橋本 和仁

政策研究大学院大学政策研究科教授

林 隆之

文部科学省大臣官房審議官

松浦 重和

情報通信研究機構NICTナレッジハブ上席研究員

村山 泰啓

人間文化研究機構国文学研究資料館長

渡部 泰明

文部科学省大臣官房審議官

専門委員

池内 有為

文部科学省大臣官房審議官

生貝 直人

一橋大学大学院法学研究科教授

大向 一輝

東京大学大学院人文社会科学系研究科准教授

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホーム＆事業紹介／資料の収集／科学技術情報整備／科学技術情報整備審議会

<https://www.ndl.go.jp/collect/tech/council/index.html>



第18回科学技術情報整備審議会

韓国国立中央図書館との第25回業務交流

令和7年7月7日から12日まで、国立国会図書館において韓国国立中央図書館（NLK）との業務交流が行われ、NLKからキム・ヘリョン（金恵蓮）オンライン資料課長を団長に、イ・オクジュ（李沃柱）知識情報サービス課司書事務官、イ・スギョン（李壽暎）デジタル情報企画課司書主事補の3名の代表団が来日しました。

東京本館では、まず基調報告として、両館の現況と課題について双方から報告しました。次の「図書館業務・サービスへの先進技術の応用」をテーマとするセッションでは、NLKからは人工知能による光学文字認識（A・OCR）を活用した国家文献データセットの構築について、当館からは、NDL・OCR等によるデジタル画像からのテキスト化について報告しました。さらに、「DX時代の利用者の情報探索支援」をテーマとするセッションでは、NLKからは、協力型デジタルレファレンスサービス「司書に聞いてみましょう」について、また、当館からは、リサーチ・ナビを中心とする発信型の情報探索サービスについて報告しました。各セッションの質疑応答では、両館の今後の課題や展望に関し活発な意見交換が行われました。

その後、関西館の視察を行いました。



韓国国立中央図書館代表団と基調報告出席者

新刊案内

令和6年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録
「変わる！子どもの読書環境と児童文学」

デジタルメディア環境の変化と子どもの発達
変わる／変わらない子どもの本―人気シリーズ「ゾロリ」「ルルとララ」の再検討―
子どもの読書とゲーム

童話と映画のあいだ―『魔女の宅急便』―
国際子ども図書館の読書・学習支援コンテンツ紹介



A4 94頁 年刊 2,090円（税込）
ISBN 978-4-87582-945-4
発売 日本図書館協会

NDL Topics

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第305号

アメリカの選挙運動等におけるディープフェイク規制—2024年9月のカリフォルニア州における法整備を中心に—

アメリカ・カリフォルニア州におけるトランスジェンダー等の者の性別変更と氏名変更のための法的
手続

オーストラリアにおける情報公開に関する憲法改正及び
情報自由法の制定



A4 97頁 季刊 1,980円 (税込)
ISBN 978-4-87582-947-8
発売 日本図書館協会

レファレンス 896号

米英ニュージールランドにおける軍隊の構成員及びユニットの自衛の権利—ルールズ・オブ・エンゲージメント (ROE) 文書において示された見解—
労働からの解放に関する労働時間法制—休日、年次有給休暇、勤務間インターバル制度、つながらない権利—
スイスにおける武器輸出をめぐる議論—軍需物資法の制定及び改正を中心に—



A4 79頁 月刊 1,100円 (税込)
発売 日本図書館協会

レファレンス 897号

表現場所の理論の現在—最近の「集会の自由」判例を素材に—
プラネタリー・バウンダリーと持続可能な発展
ブレイン・マシン・インターフェース (BMI) の使用と国際人道法
諸外国の政党法・政党法制—組織・意思決定に係る規定を中心に— (資料)



A4 99頁 月刊 1,100円 (税込)
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 365号

オープンアクセスリポジトリ連合 (COAR) とリポジトリを巡る現状

Notable Japanese Collections in North America : 米国

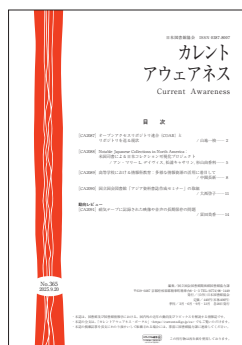
司書による日本コレクション可視化プロジェクト

高等学校における情報科教育 : 多様な情報資源の活用に着目して

国立国会図書館「アジア資料書誌作成セミナー」の
取組

△動向レビュー▽

磁気テープに記録された映像や音声の長期保存の問題



A4 20頁 季刊 440円 (税込)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3523)0812

ごちゃ
ごちゃ



ぎゅう
ぎゅう



展示会

絵探し絵本と なかまたち

"Search and Find Books" and Their Friends



前後期総入れ替え!

前期

2025年 10月 7日(火)～12月21日(日)

後期

2026年 1月20日(火)～4月19日(日)

休館日 毎週月曜日、国民の祝日・休日、毎月第3水曜日(資料整理休館日)

開館時間 9時30分～17時

会場

国際子ども図書館 レンガ棟3階 本のミュージアム

左上から時計回りに、『旅の絵本』安野光雅 作 福音館書店 1977 (前期)、『チャレンジミッケ! 11 (へんてこりんなおみせ)』ウォルター・ウィック 作、糸井重里 訳 小学館 2021 (後期)、『とこちゃんはどこ』松岡享子 作、加古里子 絵 福音館書店 1970 (前期)、『ゲキをさがせ!』デー・チョンキン 作・絵 徳間書店 2008 (前期)、『新ウォーリーのふしぎなたび』マーティン・ハンドフォード 作・絵、唐沢則幸 訳 フレーベル館 2000 (前期)



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

入場
無料

NO.775

NOVEMBER
2025

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
"Tsuchiyama zosho mokuroku": Intellectual activities of minor officials at
the Imperial Court during the Edo period
- 08 New series: Behind the National Diet Library
Part 1: Creating the National Diet Library Gallery
- 18 Materials newly available in the Modern Japanese Political History
Materials Room
- 07 <Tidbits of information on NDL>
Welcome to the magazine stacks!
- 17 <Books not commercially available>
Meiji tokyo no shosei shakai: Suzuki shikanosuke zaikyo nikki no sekai
- 25 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和7年11月号 (No.775)

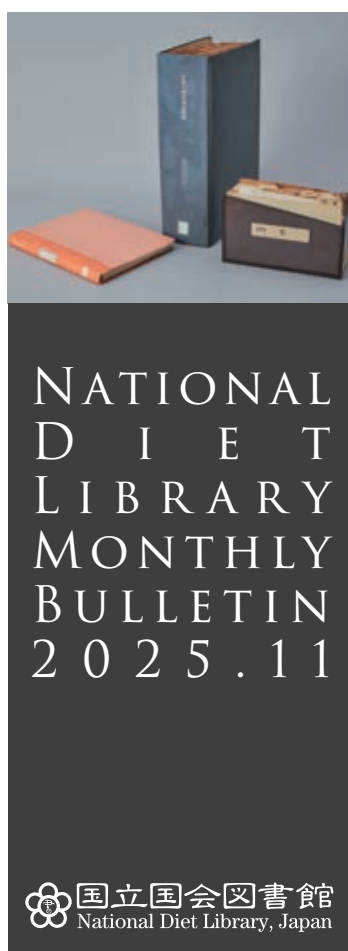
令和7年11月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 田中智子
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



図

国

国

書

人

士